

私には、幼い頃から変わらず持ち続けている夢があります。それは「医師になること」です。この夢を初めて口にしたのは、幼稚園の卒園式のスピーチでした。当時の私は将来について深く考えたこともなく、ただ医師やパティシエへのあこがれから、漠然と夢を描いていたのだと思います。

それから数年が経ち、小学生になった私は、両親の仕事が終わるのを待つために、病院の休憩室で過ごすことがよくありました。ある日、退屈にしていた私は診察室の様子をドアの隙間からこっそり覗いてみました。そこには、笑顔で患者さんと接する母の姿、丁寧に治療法や薬の説明をする父の姿がありました。普段は見せない、真剣で凛としたその姿が、幼い頃の私にはとてもカッコよく、眩しく見えました。それ以来、診察室を覗くことが私の日課となり、私の中の「医師になりたい」という想いは、単なる憧れから確かな将来の夢へと変わっていきました。

この小さな夢は、今では私の大きな目標となり、実現に向けてさまざまな挑戦をしています。その一つが、今夏に参加した、障がいのある方々をサポートするイベントです。私にとって初めての経験で、不安もありました。最初は「しっかり手伝わなければ」「参加者の方を楽しませなければ」と、力が入りすぎていました。しかし、イベント主催者の方の言葉が私の考えを変えました。「参加者の方に"おもてなし"をするではありません。向こうから積極的に参加してもらい、君たちも一緒に楽しんでください。」その言葉にハッとし、自分が無意識のうちに障がいのある方々に対して偏見を持っていたことに気がきました。障がいがあるからといって、感情がないわけでも、何もできないわけでもありません。ただ少しだけ、意思を伝えるのが難しかったり、体を自由に動かしにくかったりするだけなのです。障がい者の方々を「助ける対象」として見るのではなく、同じ時間を共有し、一緒に楽しむことこそが本当のサポートなのだと実感しました。二日間、そうした環境に身を置いたことで、私の考え方は大きな気づきを得ました。ハンディキャップがあっても、笑ったり、悩んだり、挑戦したいと思ったりする気持ちは、私たちと変わりません。

「みんな同じ人間なんだ」——イベントを通して、私はその当たり前で大切なことを心から実感しました。これから医師を目指す者として、この経験を一生忘れずに大切な気づきになりました。私はこの経験を通して、医師を目指すうえでとても大切な「人と向き合う姿勢」を学ぶことができたと思っています。この学びを胸に、医師という道を歩んでいきたいと、あらためて強く感じました。

高校に入ってから、将来や進路について考える機会が増えました。「医師になる」という夢は変わりませんが、自分がどのような医師になりたいかという具体的な将来像は、まだはっきりとは描けていません。それでも、いつかは祖父や両親が築いてきた病院を継ぎたいという思いがあります。しかし、最近では医療従事者の不足や財政難により、地方では閉院を余儀なくされる病院も増えていると聞きます。そんな中で、自分に何ができるのか、どこでどう役立てるのか、日々考えを深めているところです。

何年後かの未来、私がどこで、どんな医師として働いているのかは、まだ想像できません。けれど、両親のように、患者さんに寄り添い、その人の心に寄り添える医師になりたい。そう強く願いながら、私は今、夢への一步を踏み出しています。